

ほんとうの幸せ

——宮沢賢治と『歎異抄』——

鍋島直樹

はじめに

たとえ太陽と月が雲や霧に覆われようとも、雲や霧の下には光が届いている。同じように知るべきである。あなたの心が苦しみや悲しみの雲や霧に覆われようとも、それら心の雲を突き抜けて仏の慈悲があなたを護る。心を覆うどんな雲や霧も救いの妨げにはならない

（親鸞聖人『正信偈』意趣）

皆さん、こんにちは。寒いですね。鍋島と申します。好きな食べ物はハーゲンダツツのアイスクリームです。今日は十二月の最後の大切な講座にあたり、すばらしいホールでお話しさせていただくことを感謝しています。どうか最後まで楽しんで聴いてください。

今日、皆さんにプレゼントしたいお話は「ほんとうの幸せってなんだろう」ということです。幸せの意味を、宮沢賢治さんを通して学びたいと思います。私たちの周りには毎日、戦争やテロ、殺人や虐待の悲しい現実でおおわれています。テレビのニュースを見るのが悲しくなるくらい、毎日、嫌なことが続いています。ですから、殺人をしてはいけない、戦争してはいけないというだけではなく「ほんとうに美しいものは何か」ということを今日、考えてみたいと思うのです。それを考える手がかりとして、宮沢賢治さんの童話、詩、仏教の心を皆さんと一緒に探究していきます。

宮沢賢治の求めたもの

宮沢賢治さんは三つの特徴を持っています。一つは、科学者で、たくさんの植物や星、岩石、化石を研究され、その科学的知見を農業のために活用する道を開いた方です。現在、龍谷大学で宮沢賢治展を開催しています。開催するにあたってお生まれになった岩手県稗貫郡花巻まで行ってきました。そして思いがけず宮沢家にご支援いただき、賢治さんが北上川で見つけた化石をお借りすることができました。彼は科学的なものの見方を深めたところがあるのです。

二つ目は、詩人、童話作家です。その作品の中でも、有名な『セロ弾きのゴーシュ』『グスコープドリの伝記』をのちほど皆さんに紹介して彼の美しい世界を感じていただきたいと思います。

そして賢治さんの三つの目の特徴は、仏教徒であることです。賢治さんは浄土真宗の家庭に生まれ育ちました。

賢治さんのお父さんは政次郎、お母さんはイチといわれます。両親とも信仰が厚く、賢治さんは親につれられて、八、九歳の頃から大沢温泉で開かれた仏教講習会に参加しています。子どもの頃の賢治さんは、島地大等、暁烏敏さんの講演を聴いたといわれます。賢治さんが小学校の二年生の頃には『正信念仏偈』をすべて暗記して、冬には炬燵やぐらに上って大きな声で唱えていたというくらい浄土真宗に深いご縁を持っておられます。当時は日露戦争がおこっていた時ですが、彼は戦争に向う兵士を、「万歳、万歳」と見送っている中で、一人「兵隊さんが死んだらどうなってしまうの？」と悩んだといえます。「皆、白骨になつてしまふ」と叔母さんが説明すると、それを聞いて賢治さんは涙を流したといえます。また小学校の頃は、友だち思いのところがあつたといわれます。彼の家は質屋でお金持ちだったので、友だちには農民が多くて作物のとれないときは、貧しい生活を送っていました。ある日、友だちが弁当を隠して食べているのを見かけました。お餅のようだったので「それお餅？一つくれる？」と賢治さんが言って、もらいます。それはお餅のようですが、蕨をついただけのお餅だったのです。蕨は知っていますよね。運動会の時、下に敷いてゴザに

ほんとうの幸せ

するような薬を刻んで食べていたのです。賢治さんは胸が痛くなりました。自分は質屋の家なので真っ白いご飯を食べているのが恥ずかしくなりました。それで賢治さんは自分の弁当箱を隠して白いご飯をそっと食べたといっています。そんな友だち思いの賢治さんでした。

そして十五歳、中学三年生の時、八月に一週間、岩手山の浄土真宗の願教寺において開かれた仏教講習会や大沢温泉で仏教の話を聴かれています。それに感動してのちにお父様に手紙を送っています。皆さん、十五歳の頃を振り返ってください。これが賢治さんの手紙です。

小生はすでに道を得候。歎異抄の第一頁を以て小生の全信仰と致し候。もし悉くを小生のものとなし得ずとするも八分までは会得し候。念仏も唱えており候。仏の御前には命をも落とすべき準備充分に候。幽霊も恐ろしくなくこれ候。なんとあれば念仏者には仏様という味方が影の如くにそいてこれを御護り下さるものと承り候えば、報恩寺の羅漢も回るべし。岩手山の頂上にひとり夜登ることまたなんの恐ろしき事かあらんと存じ候。

賢治さんは、わずか十五歳で親鸞の言葉に学び、『歎異抄』の書物を自分の全信仰としてとお父さんに告白しています。何も恐くない、仏様が私をいつも守ってくれているから、と。十五歳の少年の手紙としては驚くべき内容です。私は『歎異抄』を十五歳で全信仰としはしていませんでしたし、『正信偈』を八歳で丸暗記していることもありませんでしたので、彼がいかに仏教に心を寄せていたかがわかります。

ところが彼は長男でした。長男の彼は質屋のお父さんの跡を継がなければいけなかったんです。お父さんはお金持ちでしたが、賢治さんの周りにいる友だちは農家の人々が多く、貧しきもののために生きたいのに、貧しきものから服を安く買い取って、服を高く貸し付けて、貧しいものの味方でない仕事をするのが嫌だったようです。お父さんと口論になって、何度も議論を交わしています。彼は純粹に農民のために生きようと努力するのですが、なかなか自己を生かす道が見つかりません。そういう時、『法華経』という經典に十八歳の頃に出会います。その本は浄土真宗の島地大等が現代語訳した『法華経』の經典でした。一言で言うと、今、この世で世界の幸せを願って正しく強く生きていくことを『法華経』に学ぶのです。当時の花巻の浄土真宗は、

ほんとうの幸せ

比較的裕福で恵まれた人たちが支えていました。その時の状況を感じて賢治さんは『法華経』の思想の中に、貧しいものが生きる力をもち、すべての幸せを願って生きていこうとする道を見いだしていくのです。

宮沢賢治さんはわずか三七歳で亡くなるのです。しかし、賢治さんの弟にあたる清六さんが、賢治さんの作品をトランクの中から見つけて出版していくのです。「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」という詩も、弟さんがお兄さんのトランクの中から発見して出版したものです。今回、宮沢賢治展を開催するために、花巻を訪ねたとき、思いがけず、宮沢清六さんの孫にあたる宮沢和樹さんにめぐりあいました。「賢治さんの写真と『雨ニモマケズ』の手帳を貸してください」とお願いにいったとき、「京都の龍谷大学から花巻までお越しになった方はあなたが初めてです」と言われました。法華経は現在の日蓮宗にあたります。ですから、「浄土真宗の人はほとんど来ませんでした。実は賢治さんは法華経に傾倒していたのですが、賢治さんの心の中には親鸞の求めた世界の心、日蓮の求めた心、釈尊のとらわれのない心が一杯広がっています。だからその中庸の精神を、展示を通して知っていただけたらいいですね」と宮沢和樹

さんは私に言ってくださいました。本当に深い感動でした。

お孫さんの宮沢和樹さんに、二〇〇五年十二月一日、龍谷大学にお越しいただき、「宮沢賢治の銀河世界」というテーマで、特別対談をさせていただきました。その時に和樹さんから学んだことをここでご紹介したいと思います。賢治さんは、一つは科学者、二つ目は詩人、童話作家。三つ目は仏教徒ですが、さらにもう一つ、彼は芸術がとても好きでした。貧しくて、食べるものさえない、岩手の人たちに芸術の力を教えたのです。ここに賢治さんの作曲した「星めぐりの歌」の入ったオルゴールを持ってきましたのでどうか聴いてください。

賢治さんは音楽が人間の生きる力になると信じて、自らヴァイオリンを弾いたり、作曲をして農家の人といっしょに歌ったりしています。その曲風も、クラシックの交響曲のように、のびやかで、明るく、作曲されています。このオルゴールは花巻で買いました。こういう音楽を皆さまに聴いていただいたら心がなごむかなと思って紹介いたしました。もう一曲、ここで賢治さんの曲をオーケストラに編曲したものを会場で流していただきたいと思います。

ほんとうの幸せ

本当の幸せ

ほんとうの幸せとは、何でしょうか。それを考えさせてくれる、賢治さんのある文章を朗読いたします。

わたしたちは、氷砂糖をほしくらゐるでもないでも、きれいにすきとほった風をたべ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいほろほろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものに、かはってゐるのをたびたび見ました。

わたしは、さういふきれいなたべものやきものをすきです。

これらのわたくしのお話は、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらつてきたのです。……わたくしは、これらのちひさなものがたりの幾きれかが、おしまひ、あなたのすきとほったほんたうのたべものになることを、

どんなにねがふかわかりません。

（『注文の多い料理店』序文）

農家の人たちは服を買うお金もなくボロボロなのですが、それが朝日に照らされたり、あたたかい日差しに照らされたり、夕焼けに照らされると、金色に輝いたり、桃色にかわつたりして、美しい羅紗やビロードの服に変わります。そこにほんとうの幸せを感じる時間があります。何かを買う幸せではありません。そよそよ吹く風に、思わず気持ち、ふわっとやわらいだり、辛い時に見上げた太陽、月、星が自分の気持ちを慰めてくれます。ふと気づくと、ひとは誰しも自然に生かされています。私がこのままで光を受けて輝いている、私は独りぼっちでないということを感じるところに、ほんとうの幸せがあると教えてくれると思います。

童話に込められた思い

—「ゼロ弾きのゴージュ」—

彼は童話作家です。賢治さんは、自分の書いた童話が、「あなたの透きとおったほ

ほんとうの幸せ

んとうの食べ物になってほしい」と願っています。「透きとおったほんとうの食べ物」とは何でしょうか。僕は、カレーライス、ハンバーグ、ハーゲンダッツとか大好きです。皆さんも好きな食べ物があることでしょう。「透きとおったほんとうの食べ物」とは、口の中に入れる食べ物ではなく、音楽を聴いたり、授業を聴いたり、口の中に飲み込むわけじゃないけど、童話を読んで、心があたたまったり、友だちの話を聴いて心が透きとおったりします。目に見えない大切なものを「透きとおったほんとうの食べ物」と賢治さんは表現しているのです。賢治さんは、お父さんと対立してうまくいきませんでした。未来の自分に不安をかかえていました。そんな時、あるお坊さんから「そんなに信仰に夢中にならずに、あなたの感じている仏の願いを童話に書いてみたら」と言われて童話を書くようになります。だから賢治さんの物語は実は仏の願いがこもった物語なのです。

そこで、賢治さんの童話のひとつである、『セロ弾きのゴーシュ』の話を紹介したいと思います。セロはチェロのことですね。ゴーシュは左利きという意味で、不器用という意味もあるそうです。『セロ弾きのゴーシュ』は、金星音楽団のチェロを担当

するゴーシユさんの物語です。ゴーシユはチェロを弾くのですが、あまりチェロが上手じゃない。そのため金星音楽団の中で練習をするのですが、指揮者の楽長から「セロ弾きがなっていない。ゴーシユ、君はリズムが遅れている」といつも叱られるのです。ドキドキしながらゴーシユは練習するのですが、いよいよ楽長が怒って「ウーン、こんなものでは練習にならない。来週が本番なのにどうするか。家に帰って一生懸命練習してきなさい」と叱って、その日は終わるのです。ゴーシユは楽長に厳しく叱られてトボトボと自分の家に帰ります。水車小屋のある小さな家にゴーシユは帰って、その夜から毎晩、夜通し練習します。

するとその夜、猫がコンコン、「ニャーオ」とやってくる。猫好きな人いますか？ 僕も大好きです。僕の家には「優」という猫がいます。「ファイト」の優と同じ名前です、黒い毛のベルシャ猫です。寝る時は僕と一緒に、僕がトイレに入ると猫も入ってきてゴロゴロ鳴きます。寝ていると僕の手をペロペロとなめることもあります。とても仲がよくて、朝、僕が起きるのが遅いと、優は僕の顔をなめるんです。猫の舌、ご存じですか。ざらざらなのです。猫のざらざらの舌でなめられるので、僕は目覚めが

ほんとうの幸せ

悪いのです。人間とはことなる猫が家庭にいと気持ちちが和らぎます。話を物語にもどしましょう。

第一日目の夜、猫がやってきました。「ゴーシュさん、このトマトでも食べてくださいな」。するとゴーシュは「なんだ、そのトマトは俺の庭でとれたトマトじゃないか。しかも青いし、ちっともおいしくなさそうだ。なんの用だ」と答えます。猫は「ゴーシュさん、まあそんなに怒らずに、シューマンの『トロイメライ』というロマンチックな曲を聴かせてくださいな」と頼みます。するとゴーシュさんは「なにを生意気な。猫の分際で。何が音楽だ」と猫をいじめるんです。皆さんにもないですか。上司から叱られてシュンとしても、自分よりも弱い立場に対しては強く出る。これがゴーシュさんの気持ちですね。猫に強くあたるのです。「じゃ、聴かせてやろう」と猫に曲を聴かせるのですが、その曲はなんと「インドの虎狩り」という曲でした。ギコギコガーガーと、とても激しい曲で、猫は体中に火花が散ってそこでボタンと倒れてしまうくらいです。「お願いします。こんな激しい曲は結構ですからやめてください」と言ってもゴーシュさんは弾きつづけるのです。こうして一日目の夜が終わりま

す。猫は目がグルグルと回ってしまいました。可哀相にね。これは「音楽には静かな曲もあるけれど、ハードロックのように激しい、体を震えさせるような曲もあるんだ」ということを表現しているのでしょうか。

さて二日目の前には、またある動物がやってきます。なんでしょう。カッコウがやってくるのです。ゴーシユさんが練習しているとやってきて「カッコウ、カッコウ、ゴーシユさん、お願いします。ドレミファを教えてくださいな」と頼みます。ゴーシユは「生意気な鳥め、カッコーカッコーとしか啼かないじゃないか。どうしてドレミファを教えるんだ」、「いえ、カッコウでも、それはとても大切な音程なのです。ゴーシユさんのチェロとカッコウの鳴き声を弾きあわせて本当のドレミファを教えてください」。あまりカッコウに頼まれるものだから「わかった、弾いてやろう」とゴーシユはこたえます。おそらく「カッコウ」と鳴いた後で、チェロで「フッフィン」と弾き、「カッコウ、フッフィン」と練習が始まります。やがて弾いているうちにカッコウの音程が合っていて、チェロの音程がわずかにずれているのに気がつくんですね。「僕の方が音程が違っているかもしれない」と。さらに、練習をしていると、だんだ

ほんとうの幸せ

んとゴーシユは頭がグラグラしてきて「ああこのまま演奏していたら俺はカッコウになつてしまふ。もうやめてしまおう。こら、カッコウとばかり啼く奴は食つてしまふぞ。早く出ていけ」と追い出すのです。カッコウは窓が閉まっていたので窓にぶちあたり、嘴から血が出てきます。「待て待て、今、窓を開けてあげるから」と言つてもカッコウは恐くて何度も窓にぶつかって口から血が流れます。思い切つてゴーシユが窓をバーンと蹴つて窓が開くと、カッコウは遠くへ飛んでいくのです。これが二日目の夜でした。きつとゴーシユさんは、音程をカッコウに教えてもらったんですね。

三日目はラクーン。タヌキがやってきます。ポンポコポンポコポン。お腹を叩いて「このリズムに合わせてチェロを弾いてくださいな」と練習をします。するとタヌキのリズムの方が正しくて、ゴーシユさんは自分が遅れているところがあると気づきます。タヌキはすかさず「ここの小節の二番目の音譜のところで少しゴーシユさん、リズムが遅れますね」。ゴーシユは「その通りだな」と思つてだんだんとリズムを習得していきます。

この話の中で僕が好きなのは四日目の夜の話です。今度は小さな子ネズミとお母さ

んネズミがやってきます。お母さんネズミが「実は、うちの子どもが病気なんです。ずっと体がぶるぶる震えて動けない。だからゴーシュさんの演奏を聴かせてやってください。ゴーシュさんの演奏を聴けば、きっと子どものネズミの病気は治ります。お願いします」と頼みます。するとゴーシュは「僕は医者じゃない。医者じゃない僕がどうしてネズミの病気を治してあげることができようか」と断るのです。お母さんネズミが「いえいえ、あなたはチェロの演奏でたくさんさんの動物を、ご存じのない間に治しておられるのです。ゴーシュさんが住んでいる床の下には病気になったウサギがやってきて、ゴーシュさんの演奏を聴きます。やがてウサギは元気になって帰ります。鹿が、体が悪いとゴーシュの曲を窓の外で聴いて、その日にはよくならなくても明るる日にはすっかりよくなっているのです。だからどうか、ゴーシュさん、私の子どもにも音楽を聴かせてやってください」。それを聞いて、ゴーシュさんはネズミに「わかった、じゃ、僕のチェロを聴かせてあげよう」と言い、チェロの穴の中に子ネズミをコトンといれて曲を弾くんですね。どんな曲がいいでしょう。そうですね。ドヴォルザークの「新世界」を演奏したとしましょう。ゴーシュが一曲弾き終えて子ネズミ

ほんとうの幸せ

をチェロの穴からポトンと出してあげると、その子ネズミはしばらくブルブルと震えているんですが、突然バーツと走り出すんですね。それを見たお母さんは「ありがとうございます。ありがとうございます。うちの病気だった子ネズミが元気になりました。ゴーシュさんのおかげです。ありがとうございます」とお礼を言います。ゴーシュはうれしくなって、人に感謝されたことがないので、お母さんネズミに「ところで、君たち、パンは好きか？」とたずねます。お母さんネズミは「私たちはゴーシュさんのチェロ演奏を聴きにきただけでパンをもらいにきたわけではありません。パンをいただくなど滅相もない。勿体ないことです」と断ります。「いやいや、パンが好きかと聞いただけだから」とゴーシュが答えると、ネズミの親子が「パンは大好きです」と返事します。ゴーシュはそつと親子のネズミの前にパンを一切れ、千切っておいてあげます。パンの一切れをもらった親子ネズミは「ありがとうございます。ありがとうございます」と喜んで帰っていきます。こうしてネズミたちも帰っていきました。さて、このシーンは何を意味しているのでしょうか。

皆さん、音楽好きですか。僕は大好きです。高校時代から合唱をやっていました。

唯一の自慢は、高校時代に合唱部で全国優勝したことです。十一分間のアカペラ曲を歌って全く音が下がらなかった。二十四部合唱を九十四人の合唱団で神戸高校の時に歌いました。それが懐かしい思い出です。音楽を聴くと癒されるでしょ。最近、僕がよく聴いているMDは修二と彰の「青春アミーゴ」です。そういう曲を聴くと元氣が出ます。この間まではAYUを聴いていました。最近は大塚愛にはまっています。音楽という芸術は、人の身も心も癒してくれることを、ネズミたちが教えてくれているでしょう。

こうして動物たちに支えられて、ついに本番のコンサートでは大成功をおさめます。演奏のあとで、下手だと思っていたゴーシユに皆が尊敬の目を向けます。そして指揮者の楽長は「アンコールはお前が行って弾いてこい」とゴーシユを褒めるんです。迷ったあげく「じゃ、行ってきます」と言って、ゴーシユが弾いた曲は、あの猫に聴かせた「インドの虎狩り」の曲でした。ギコギコガーガーと聴かせると、会場中に電氣が走ったように感動して再び大拍手で迎えられます。このようにゴーシユは大成功してこの話は終わるのですが、この物語の中で私が最も好きなのは最後のところ

ほんとうの幸せ

ろです。ゴーシユが大きな拍手をいただいて楽長にも褒められて水車小屋に帰った時、
こういうふうに書かれています。

その晩遅く、ゴーシユは自分の家に帰ってきました。そしてまた水をがぶがぶ
のみました。それから窓を開けて、いつかカッコウが飛んで行ったと思った遠く
の空を眺めながら「ああ、カッコウ、あの時はすまなかったなあ、俺は怒ったん
じゃなかったんだ」と言いました。

こういう物語です。僕はこの最後が一番好きなのです。

私たちは、いいえ特に僕は、上司から叱られたり、正しいことを言われると「そ
うだな」と思ったりして小さくなります。何も言えず「自分がだめだな」と思ってしま
います。それなのに今度は自分より弱いものに対しては「こうした方がよいと思う」
と意見をして強く出てしまいます。ゴーシユさんが楽長さんに叱られて小さくなった
後、動物に対して「生意気な、生意気な」と強く出たのは、あたかも僕自身のことの
ようです。強いものに対しては弱くても、弱いものに対しては偉そうにしてしまう。
そんなゴーシユさんですが、音楽会で大成功をおさめた後、自分がカッコウや猫やネ

ズミやタヌキに支えられていたことに気がつくんですね。「あの時はカッコウに悪いことをしたな。怒ったつもりではなかったんだ」と言っているところが僕は好きなんです。大成功してめでたしめでたし、万々歳で終わる物語ではありません。「自分は傲慢で相手のことも気づかわずに強く言いすぎてしまったなあ。ごめんなさい」と素直になっているところが、この物語の最も美しいところだと僕は思うのです。

実はこの『セロ弾きのゴーシュ』は『歎異抄』の第五章、親鸞が語ったと言われる「一切の有情は皆もて世々生々の父母兄弟なり」、「生きとし生けるものは生まれかわり、死にかわりしながら、父であり母であり兄弟であつたのです」という文章に基づいて作られたと考えられます。これが『セロ弾きのゴーシュ』の物語の背景です。この物語には、仏教の心が深く深く表れていることがわかっていただけたと思います。楽しんでいただけましたか？

どうして今日、童話の話とか「氷砂糖をほしるくらいもたないでも」という『注文の多い料理店』の序文を読んだかというと、ほんとうに美しい世界、風を食べ、朝日を飲むような本当にやさしい心を知った時、殺人とかテロの気持ちは起こってきませ

ん。自分が誰にも愛されず、自分の世界だけに閉じこもってしまい、自分だけが正しいという思いにとらわれてしまうから、正義を振りかざして人を殺したり、戦争をしたりするのでしょう。賢治さんの美しい世界に出会えば、戦争などの傲慢な争いがなくなっていくと心の底から感じます。

宮沢賢治のメッセージ

―「雨ニモマケズ」

賢治さんが書かれた有名な「雨ニモマケズ」の載っている手帳があります。そこで、「雨ニモマケズ」という詩を皆さんに紹介して、その意味をたずねてみたいと思います。

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

慾ハナク

決シテ瞋ラズ

イツモシヅカニワラツテキル

一日ニ玄米四合ト

味噌ト少シノ

野菜ヲタベ

アラユルコトヲ

ジブンヲカンジョウニ入レズニ

ヨクミキキシワカリ

ソシテワスレズ

野原ノ松ノ林ノ蔭ノ

小サナ萱ブキノ小屋ニキテ

東ニ病氣ノコドモアレバ

ほんとうの幸せ

行ッテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ

行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ

南ニ死ニサウナ人アレバ

行ッテコワガラナクテモイイトイヒ

北ニケンクワヤソシヨウガアレバ

ツマラナイカラヤメロトイヒ

ヒデリノトキハナミダヲナガシ

サムサノナツハオロオロアルキ

ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハ

ナリタイ

という詩です。

この詩とよく一緒になって賢治さんのうつむいた立像の写真がよく使われます。けれど宮沢賢治さんの弟の清六さんの孫にあたる和樹さんとお話をした時、この写真の秘密を聞いたんです。一見すると、このコートをきてうつむいている賢治さんの立像は、暗く、考えにふけているようなイメージがあるでしょ。でも本当は違うのです。賢治さんは科学が大好きだった。それで賢治さんが写真館の友だちにお願いで撮ってもらった写真なのです。写真館から上等のカメラをわざわざ外に持ち出してほしいと賢治さんが友だちに頼み、ほうしをかぶり、コートをきた賢治さんが、「この少しうつむいたポーズで撮ってください」とお願いして撮ってもらいました。さて、これはある作曲家を真似て撮ってもらったものですが、その作曲家は誰でしょうか。誰かわかる人いますか？ 実はベートーベンなのです。田んぼの上で賢治さんはベートーベンの恰好で撮ってもらったのです。しかも農作業の時は長靴の中にズボンを入れますが、外に出して長靴を革靴のように見せているそうです。そんな秘密があったので

ほんとうの幸せ

すね。ドリームランドを意味する「イーハトーブ」という言葉をつくり、貧しくて、なかなかお米も畑の実りもとれないけれど、この岩手県の大地こそ、ほんとうに美しい芸術の夢の世界、ドリームランドであるということです。彼が農民たちを勇気づける意味でも、田畑の上に立って、写真を撮ってもらったのではないかと思います。どんなに貧しくても、そこに光り輝いた世界があるということをベートーベンの恰好をして伝えたかったのかもしれませんが。

賢治さんは「雨ニモマケズ」の精神で農学校の先生もしました。ここで質問です。賢治さんは跡継ぎをするのを拒んで農学校の先生になりました。なぜ農学校の先生になったのでしょうか。それは、貧しき農民が豊かに暮らせるように新しい科学の知恵を使っておいしいお米と肥料をつくるためでした。その賢治先生のやさしい横顔を知るエピソードが残っています。宮沢賢治さんはテストをする時、必ずあることをしました。正しいものを次の中から一つ選んでください。

一番、テストの時、カンニングをしていても知らんぷりをした。

二番、〇点をとっても二〇点をつけた。

三番、テストの答えを試験の前にこっそりと教えた。

賢治先生は子どもたちのことを思って、テストの際にあることをしたのですが、さて正解はどれでしょう。僕の場合は全部教えます（笑）。正解は二番です。賢治さんは〇点をとつても二〇点をあげたそうです。どんな子どもにも可能性がある、忙しく貧しくて田畑を手伝って勉強できなかったかもしれない。そのかわりカンニングをしたら三〇点を引いたそうです。このあたりも賢治さんの教育者としての思いやりがよくあらわれています。

「雨ニモマケズ」という詩の中で何が大事だと思いますか。宮沢和樹さんにお聴きしました。まず、新聞で論争になっていることをご紹介します。「北に喧嘩や訴訟があれば、つまらないからやめろと言い、日照りの時は涙を流し、寒さの夏はおろおろ歩き」と読まれています。あの手帳が龍谷大学にありますので、見にきてください。ただし、「日照りの時は涙を流し」は、賢治さんの原文を見ると「ヒドリノトキハナミダヲナガシ」となっています。それをめぐって九〇年、二〇〇五年に論争が起こっています。「どうして「ヒドリ」を「ヒデリ」に直したのか」という意見です。反対

ほんとうの幸せ

する人は反対する理由があつて「ヒドリ」は盛岡のある地域で「日雇い人夫」という意味があるそうです。貧しくて夏、作物がとれなかった時、「日雇い人夫をして涙を流し」と読んだ方がいいのでしょうか。ところが「ヒデリノトキハナミダヲナガシ」と校訂されたのは宮沢賢治さんの弟、清六さんや高村光太郎さんなのです。それで宮沢和樹さんにおうかがいすると「もしヒドリを日雇い人夫という方言として弟の清六さんが知っていたら、そのまま『ヒドリ』にしたはずです。あえて『ヒデリ』に校訂したのは、いろんな作品の表現を踏まえて『ヒデリ』の方がいいと思ったからでしょう」と教えてくださいました。夏に日照りが続くと秋に作物がとれなくなるので、皆、「どうしよう」とおろおろ歩く。『双子の星』という作品があります。その中にヨダカが出てきて、夏、喉が乾いて天の川の水をゴクリと飲むというシーンがでてきます。また「雨ニモマケズ」の詩が、全体を通して、標準語を用いていることから考えて、「ヒデリ」の方がよいと考えられます。

「雨ニモマケズ」の中で大事なことは、宮沢和樹さんによると、「行ッテ」という表現だそうです。「東に病氣の子どもあれば、行つて、看病してやり、西に疲れた母

あれば、行つて、その稲の束を負い、南に死にそんな人あれば、行つて、怖がらなくてもいいと言い」と書かれています。全部、「行く」んです。その場所に行つて自分の身をおくことがとても大事なのです。皆さんも寒くて他にしたいことがあったところを、この会場に来てくださった。行つて、ここに来てくれた。それが大事なのです。あとで済んでから話を友だちに聞いても、その時の臨場感はわからない。行つて初めて思いがけず、いろんなことに出会います。これが「行ッテ」の意味だと、和樹さんがおっしゃってくださいました。

僕には東京に日本医科大学付属病院医師で澤倫太郎という友人がいます。この澤先生とこの話をしていたら、彼は毎日いろんな患者さんに会う。難病の人、すぐ退院できる人。さまざまな患者さんのもとに行くそうです。行つて患者さんの診察をし、行つて患者さんと話をする。「行ッテ」というのは、そこに行つた時だけではなく、行く前から相手との出会いが始まっている。歩み始めた一步一步の中に相手の気持ちにだんだんと歩み寄つていこうとする自分の気持ちがある。自分が相手の気持ちに歩み寄つていけば、相手が向こうから歩み寄ってきてくれる。最初はわかりあえなくても

ほんとうの幸せ

何度も何度も患者さんのところにいくうちに、相手が心を開いて「お医者さん、ありがとう、今日もまた来てくれて」と胸襟を開いて話してくれるようになる。そう澤先生は話してくださいました。皆さんも大事なのは行くことなのです。「行ッテ」というのは、そこに行くプロセスも大事なのです。思い切ってそこに行こうとする時には、まだそこに到達していなくても、寒い中を歩いてきた一步一步の中に思いがけない出会いや、予想もしていなかった幸せが開かれるんです。じっとしては何も開かれない。そのことをここに書かれていると澤倫太郎さんは言われていました。「西に疲れた母あれば、行つてその稲の束を負い」、これは疲れたお母さんが遠くにいるんだけど、行つたらお母さんが笑顔で待ってくれていたのだと思います。「行ッテ」は自己犠牲ではありません。相互の愛情の重なりあうことでしょう。子どもである自分が親の所に行つて何かしてあげるのではなく、行つたら「よく来てくれたね」と親が子どもを両手で迎えてくれる、相手のあたたかさがあるんです。「行ッテ」というのは相手に受け入れられている。「行ッテ」というのは自分の身体が行くだけでなく、真に心が相手に至るのだと思います。そう澤倫太郎先生に教えてもらいました。

―「農民芸術概論綱要」

最後に、賢治さんが書かれた「農民芸術概論綱要」の言葉を紹介したいと思います。これは「音楽のような芸術と、仏教のような相互に支えあって生きる思想をよりどころとするときに、ほんとうの力強い生き方が内からあふれてくるよ」と農民に呼びかけた本です。その中で賢治さんは、「世界がぜんたい幸福にならないうちには個人の幸福はあり得ない」と書いています。これが仏教の心です。自分だけの幸せに満足するのではなく、相手が幸せになることが自分の幸せになる。さらに彼はこう書いています。

自我の意識は個人から集団、社会、宇宙と次第に進化する。

新たな時代は世界が一つの意識になり、生物となる方向にある。

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識して、これに応じて行くことである。

われらは世界のまことの幸福を索ねよう。求道すでに道である。

ほんとうの幸せ

小さな自分の世界だけに閉じこもっていずに、いろんな場所に行って、いろんな人に出会い、精一杯努力をして、人間同志も自然との関係も深く通いあい、世界が一つの意識になり、一つの生き物になっていくことが、めざすべき世界であるということです。自分の殻を破って、「生きとし生けるものはすべて仲間である。一つの生き物である。」と思えばえるところに賢治さんの示した「ほんとうの幸せ」の道があります。また賢治さんは『農民芸術概論綱要』の中で農民にこう呼びかけています。

「まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて、無方の空にちらばらう。」

この文章の一番大事なところはどこだと思えますか？ 東京の少年、澤裕一郎君に聞いてみたら、「微塵」という言葉が大事だと少年は言いました。この少年はそのことばの大切さがわかっていようでした。言いかえると、「さあ、皆、いっしょに輝く宇宙の塵となって、あらゆる世界の空に飛んでいこう」と呼びかけた言葉です。「微塵」というのは何のことかわかりますか？ これは賢治さんの心の底の最後の願いなんです。彼が最後、死ぬ間際に完成したといわれる『グスコブドリの伝記』があります。これはブドリという主役が、お父さんやお母さんもいなくなり、可愛い妹

のネリもどこかに買われていってしまつて、たった独りぼっちで蚕を養蚕したり、畑で働いたりしながら生きていく物語です。そしてブドリは、ついにはクーポー博士の火山にたどりつきます。そしてブドリは、火山をうまく調整して爆発させれば、その火山によって地球があたたかくなり、岩手の寒い暮らしが温暖に変わつて、火山灰も石灰となつて降り注ぎ、肥料になつて田畑に豊かな実りをもたらすにちがいないと思つたのです。その年も寒くて、クーポー博士が「あの山が火山になつてもうじき爆発しそうだ。あの火山が爆発すれば今年の冬は寒くなくてもすむかもしれない」と言うのを聞いて、ブドリが「僕があゝの火山に行つてきます」と言います。クーポー博士は「いやいや、俺がいこう」と言うと、ブドリが「博士はこれからの研究のためにいなくてはいけません。私があゝの火山に行つて点火させて見事に噴火させてきます」と言つて火山に行く決意をします。やがてブドリはひとり火山にたどりつき、火山を爆発させました。そのおかげで、空気中には二酸化炭素が増えて温暖になり、岩手の作物は例年通り、たくさんとれました。物語はここで終わっています。

賢治さんの『グスコブドリの伝記』を今年になつて読み直して「まづもろともに

ほんとうの幸せ

かがやく宇宙の微塵となりて、無方の空にちらばらう」という意味がわかりました。

宮沢賢治さんは病気のせいで最後には、のどから血がわいてくるのですが、「自分の身体が火山灰になって農民のために役立てばいい」と心の底から思っていたのです。

そこまで賢治さんは、世界全体の幸せを願っていた人なのだと思うと涙が出ました。

この「微塵」というのは仏様の「お慈悲」のことです。親鸞が「この如来、微塵世界に満ち満ちてまします」と言われた文章に基づいて書かれたと思われます。「仏様は、塵、つまり、小さくて見えないような世界の隅々まで至り届いて満ち満ちています」という文章に基づいて「宇宙の微塵となりて」と表現されたのだと思います。微塵になつてとは、きめ細かく、相手の心にしみ通っていくような優しさをあらわしているのでしょう。僕もできたらこんな大きな体で、大きな声ではなく、微塵になって、相手の苦しみに寄り添っていったらと、この言葉から学ぶことです。

おわりに

今日は賢治さんの生涯を訪ねました。ほんとうの幸せは、風を食べ、桃色の朝日を飲むところにあります。ほろほろの服が夕日に照らされて美しい着物にかわり、友だちという時間がきらきら輝いてくることが、ほんとうの幸せではないかと思えます。ご静聴ありがとうございました。

—二〇〇五年二月二三日—